

FLORA KANAGAWA

Jan. 10. 2001 No. 51

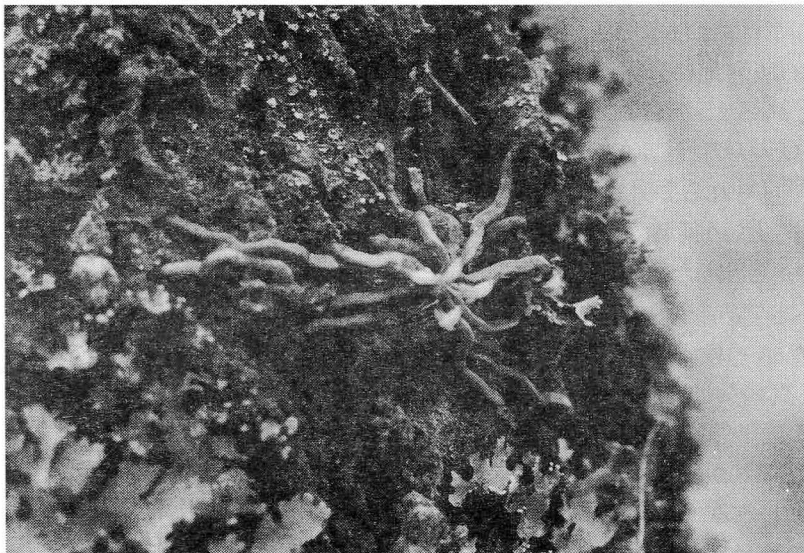
神奈川県植物誌調査会ニュース第51号

〒250-0031 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail katsu@pat-net.ne.jp

郵便振替 00230-5-10195



クモラン. 詳細は605ページ参照.

浜口哲一:フウロソウ属の帰化種について	596
吉田三夫:トキホコリ(イラクサ科)の生態について	597
長谷川義人:ヤマガキの神奈川県産の确实なる報知	599
長谷川義人:オオバイボタの原記載と現実との乖離	600
長谷川義人:ゼーメンのヤナギ学説(1903)の紹介	601
佐々木あや子:マメ科植物・話題あれこれ	603
埜村恵美子・菊地真知子:南足柄でクモランを発見	605
菊地真知子・埜村恵美子:チクゴスズメノヒエ, 神奈川県に産す	605
奥津 均:タシロランの新産地	606
奥津 均:ツルマオの県内初見	607
秋山幸也:ホウキアゼガヤ(新称)	607
勝山輝男:アメリカミコシガヤの学名訂正とナガバアメリカミコシガヤ	608
勝山輝男:アオテンツキ, ヒメアオガヤツリ, そしてシマクサギ採集記	609

フウロソウ属の帰化種について

(浜口哲一)

植物誌の原稿を書くために、フウロソウ科の標本を見て歩くうちに気になったことがいくつかあるので書き留めておきたい。なお、文献の入手にお力添え頂いた大阪市立自然史博物館の藤井伸二氏に感謝する。

(1) ヒメフウロの野生化

近年、市街地の路傍で葉が細かく切れ込み、濃いピンク色の可憐な花をつけるフウロソウを見かけることが多くなった。調べてみるとこれはヒメフウロ *Geranium robertianum* L. であった。ヒメフウロは日本では、伊吹山などの西日本の石灰岩地に分布に限られる希少な植物だが、ユーラシアおよびアメリカに広く分布し、ヨーロッパでは雑草的に生えているという。路傍で見られるようになったものも、ハープロバートという英名で花壇に栽培されているものが逃げ出した、外国起源の帰化個体と考えるべきであろう。現在のところ、一時的に逸出したという段階のようだが、横浜、相模原、平塚、真鶴など広い範囲で採集されていること、ここ数年急に目立つようになったことから考えて、これから広がっていく可能性が十分あると思われる。

ヒメフウロの葉はお全裂し、一見したところツノミオランダフウロに類似している。植物誌調査で採集された標本も、この種に同定されて

いることが多かったが、ヒメフウロの場合には各裂片の先端が黒ずんだ点状の突起に終わるのがよい特徴になる。また、全草に腺毛がまばらに生え、独特の臭いを持つ。花時に萼片が直立していること、花柱には微毛が密生するが、果実は果体(種子を入れた部分)も嘴も無毛なことも、他のフウロソウに見られない特徴である。熟すと嘴が落ち、果体が中軸の先端から2本の糸でぶら下がるという性質も特異である。

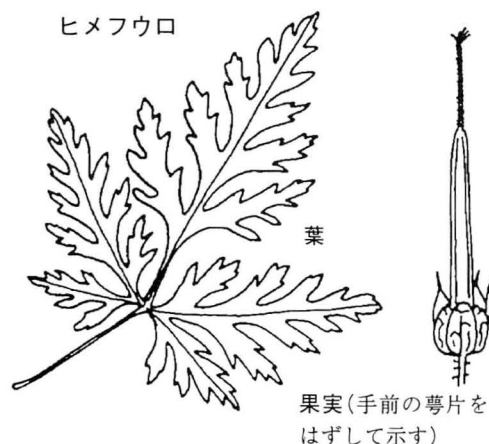
なお、標本を観察して、若干の問題を感じているのは、その花粉が黄色いということである。Webb & Ferguson (1968)によると、*G. purpureum* Vill. という近縁種があり、ヒメフウロの花粉はオレンジ色であるのに対して黄色い花粉を持つと書かれている。しかし、野生化している個体は、花が大きめで花卉の長さが1cm程度あること、果体の上端にある襟状のうねが一重しか認められないこと(*purpureum* では四重)から、ヒメフウロと判断した。

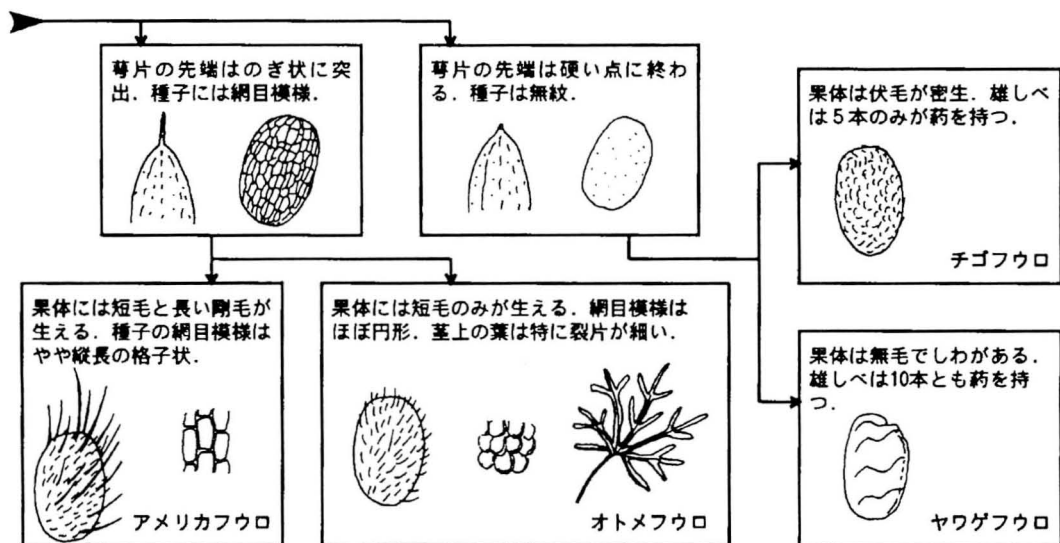
(2) アメリカフウロに似た帰化種の見分け方

太刀掛(1998)によると、フウロソウ属の帰化種として、アメリカフウロ *G. carolinianum* L., オトメフウロ *G. dissectum* L., チゴフウロ *G. pusillum* L., ヤワゲフウロ *G. molle* L. の4種があげられている。アメリカフウロは北米原産、他の3種はヨーロッパ原産で、どれも円形の葉が5~7に深く切れ込む点でよく似ている。

このうちオトメフウロは浅井(1975)によって報告されたもので、同報告によると、1950年に藤沢市内の数ヶ所で採集したとのことである。しかし、その後の採集例を聞かず、標本の所在も確認できていない。また、チゴフウロは1958年版の「神奈川県植物誌」に片瀬、藤沢に稀という記載があるが、その後は記録されていない。ヤワゲフウロは、北海道と大阪府で記録されているが、神奈川県からは未発見である。

今回、植物誌原稿執筆のために、各標本庫を回ったが、採集された標本はすべてアメリカ





フウロで、他の種は見当たらなかった。しかし、今後の探索用の資料として、Webb & Ferguson(1968), 植村(1989・1994)などを参考にしてこれらの種の見分け方を示しておく。

(3) アメリカフウロの腺毛について

アメリカフウロ *Geranium carolinianum* L. はどこの市街地でも普通に見られ、もっとも広範囲に分布する帰化植物の一つである。前項で示したような特徴で見分けられるほか、花柄が短めで花序が密につまってみえるのもよい特徴になる。

このアメリカフウロだが、現在、県内の標本庫に収蔵されている個体は例外なく花柄に密に腺毛を持っている。ところが、長田武正氏の2冊の帰化植物図鑑には、茎や花柄、果実には粉状の微細な毛が密生すると書かれていて腺毛の存在には触れられていないし、図にも表わされていない。その点に疑問を感じて、Briton & Brown(1970)などの北米のフロラを調べてみたところ、アメリカフウロの腺毛は変異が大きく、ほとんどないものから密生するものまでであると記載されていた。

現在は、少なくとも神奈川県内では、腺毛を持つ系統のものが大多数を占めていて、長田氏が図示したようなタイプのものは見られない(見られなくなった?)のではないかと思われる。

文献

浅井康宏, 1975. フウロソウ属の新外来品. 植研, 50: 159.

Briton & Brown, 1970. An illustrated flora of the northern United States and Canada. 2ed, 2. Dover Publications.

太刀掛優, 1998. 帰化植物便覧. 比婆科学教育振興会.

植村修二, 1989. 大阪府に帰化したヤワゲフウロ. 近畿植物同好会々誌, 13: 21-24.

植村修二, 1994. 走査電顕による帰化フウロソウ属2種の分果及び種子の観察. 近畿植物同好会々誌, 17: 5-8.

Webb & Ferguson, 1968. *Geranium* L. in Tutin et al.(eds.), Flora Europaea 2. Cambridge Univ. Press.

トキホコリ(イラクサ科)の生態について

(吉田三夫)

神奈川県レッドデータ生物調査報告書(神奈川県レッドデータ生物調査団編, 1995)ではトキホコリ *Eratostema denciflorum* Franch. & Sav. は絶滅危惧種とされている。牧野新日本植物図鑑(北隆館, 1970)によれば、トキホコリは畠の近くの湿地にはえ、高さ15~20cm, 茎, 葉, 花などの記載があり、果実は細小で楕円形, 云々とある。

2000年にトキホコリの群落を4カ所観察したが、湿地と考えられる場所は1カ所のみで他は日陰地であった。トキホコリが生育し得る本来的な立地がなくなり、仕方なく他の場所で生活しているのかも知れない。

トキホコリを初めて見たのは、1990年、川崎自然調査団員の林美幸氏が、お宅の庭に群落を作っている1株を青少年科学館に持ち込まれたときだった。林氏は購入した植木の土に果実が混じっていて、それが発芽した移入植物であろうと言っておられた。現在、林氏のお宅には数株のトキホコリがあるだけだが、後ろのお宅の庭端には、群落が生育している。

その後、1993、4年頃、生田緑地でトキホコリ群落を観察出来るようになった。その場所は湿地で当時は純粋なトキホコリ群落のように記憶しているが、今ではヒヨドリバナ、ミズヒキ、ミヤマシラスゲ、イヌワラビ、ツユクサ、ハルジオン、タチツボスミレなどの草本の中に点在するように、高さ3~6cmで生育している。トキホコリの長さについては後述するが、これはかなり貧弱である。同じ植分で通路側はこの夏に刈り取られたが、その1ヶ月後にはトクダミヤ他の植物よりも成長が早かった。根の問題は別として、刈り取られたことによって一時的に空間的な競争相手がなくなり、成長が早まったようだ。結果的にはトキホコリの高さは4~10cmで、従来の草本群落の中よりも他の刈り取られた方が、わずかだが成長がよいようだ。

では、トキホコリの高さ、長さ、茎径などはどうなっているのだろうか。4カ所で最大の高さ、長さ、茎径のトキホコリは垂れ下がったタマアジサイ群落の下の日陰地、通路の脇に生育していた。根元からの植物体の先までの長さは50cm、内、20cmの茎は地上を横に這って茎からひげ根を出し、残りの30cmは斜めに立ち上がって、高さ20cmになっていた。成長の良いトキホコリはいずれもこのような形をとっているが、高さは20cm以上のものは観察できなかった。茎径は5mmが最大である。このように茎が一方に傾き、高さが限られるのは、茎が軟弱なためかと考えられる。また、結実する植

物体をノギスで測ると、最小の長さは5cmで、茎径は1.5mmであった。結実する植物体の長さ、茎径にかなりの幅があるようだ。

果実の大きさは100倍の顕微鏡の接眼ミクロメータで計測したところ、長さ0.7mm、幅0.3mmの楕円形であった。更に60倍の実体顕微鏡で果実を観察したところ、果実の表面には幾条かの翼が縦に走り、薄い白茶で果実の表面と共に光っていた。粘性はなく、乾いた紙にはひっつかず、濡れた紙にはよく付き、ピンセットの先にもよく付き、トキホコリの茎には毛があるためかよくひっついていて、果実の翼は種の散布の仕掛けと関係があるのだろうか。

トキホコリは小植分にしても群落をよくつくる。これは立地との関係が大きいかも知れないが、種子の生産数との関係も深いようだ。葉腋につく色のついた果実の集合体から果実数を調べようとしたが、種が散ってしまっているものが多く、調べきれなかった。そこで集合体を幾つか調べた結果、果実数は最低50個と想定、平均的な植物体の長さ20cmの集合体を25個として果実数を計算してみると果実数は最低でも1250個となる。発芽率との関係もあるが、種子生産数は立地との関係が深く、疎生地に集まる植物ほど生産数が多く軽量であることが分かっている。このような植物と比較すると想定される最低の果実数は決して多くないが、同程度の高さの植物と比べて見ると、例えばセイヨウタンポポはカントウタンポポより種子数は多いが200個としても、トキホコリの果実数はかなり多く、立地との条件があえば群落をつくるものと考えられる。

最後になるが、この2、3年の間に、2、3株のトキホコリが生育しているのを3カ所で見つめた。これらの場所はいずれもが人の通る場所付近で、他の植物の少ない所であった。しかし、これらは1カ所を除いて無くなってしまった。これらのトキホコリは、立地を探すための先駆的な役割を担っているようだ。

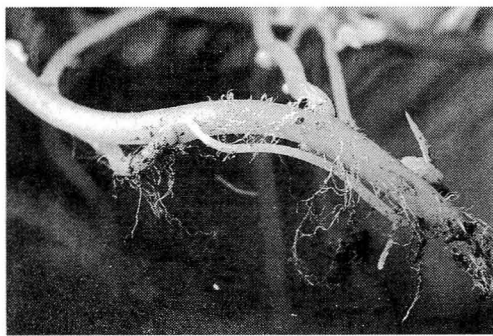
生田緑地で3カ所のトキホコリの群落を観察したが、どれもが通路の脇であり、2カ所はほ

ほとキホコリのみの群落であり、トキホコリが生育する前は他の植物はなかったものと考えられる。

4群落という狭い地域の知見から結論づけるのは早計だが、上記からトキホコリの果実を運ぶのは動物、特に人の靴底ではないかと考えられる。他の植物が生育していなく、立地が合えば、最初は2, 3株でも種子の生産数から群落を形成することは容易でなかろうか。

参考文献

沼田 真, 1987. 植物生態学論考. 東海大学出版会.



茎からひげ根を出すトキホコリ。2000.9.19.

ヤマガキの神奈川県産の确实なる報知 (長谷川義人)

実は『神奈川県植物誌1988』でヤマガキの県産が不明であったとしたが、それは従来の県目録・県植物誌など全てにヤマガキが収録されているにもかかわらず、その産地が明示されてなく、県産を疑問としたのである。しかも、多くの書が本州西部・四国・九州の産を示していたので、筆者に先入観としてこの種が神奈川県にないのではないかとの思いが強かった。しかし初山泰一先生が1982年11月に発表した神武寺(三角地帯)の植物にはヤマガキがきちんと掲載されており、どうもこの件を見落としたのは筆者の責任である。

ヤマガキの原記載は『植物学雑誌』22: 159(1908)に牧野先生がObservation on the Flora of Japan の標題の中に書かれた。*Diospyros kaki* L.f. var. *silvestris* Makino 「幹

はしばしば高くなり直立。果実は径約 3cm で球形。強い収斂性があり、種子多数。和名ヤマガキ。産地日本、野生の一型。」(長谷川訳)との英文発表である。しかしながらこの原記載では、果実が小さいこと以外に、なんらこの変種を母種から特徴付け識別することはできない。実は栽培のカキが、その種子で丘陵や里山に逸出する事は容易と考えられる。そうしてそのような個体が多いと考えている。

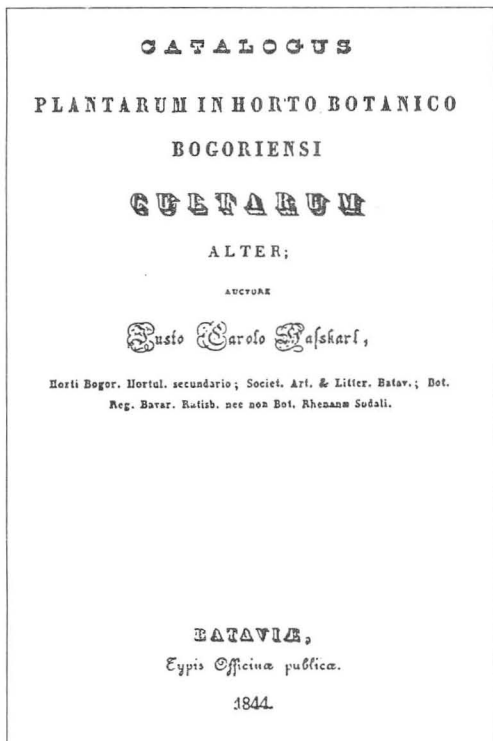
陳『中国樹木分類学』(1937)、大井『日本植物誌』(1953)、林『有用樹木図説林木編』(1969)、などにヤマガキの特徴が記されている。大井先生のこの変種の記述は簡にして、要を得たもので「野生型はヤマガキにして枝葉に毛多く、葉は稍小形にして幅狭く、子房に毛あり。」ただし「本州(西部)、四国、九州に自生」としてある。しかし、誰が牧野先生の記載に「枝葉に毛多く、葉は稍小形にして幅狭く、子房に毛あり。」の特徴を追加したかは調査の時間がない。ご示教戴ければ幸いである。

県立博物館のヤマガキのカバーには現在4点の標本があり、初山泰一 May, 28, 1981. 逗子市池子西の谷のおく, KPM-NA0096066, 0096067. 渡辺次男 Oct., 1, 1966. KPM-NA0061780. (det. Momiyama). 大場達之 May, 31, 1953 KPM-NA0023274. 丹沢中津川。このうち、初山先生の標本は確かに子房に毛のある果実の小さいであろう個体で、渡辺氏のは花果の落ち痕があり、多分花果は小さいものようである。大場氏のは花や実のない標本で筆者の所見では論評できない。この結果、初山先生採集品がヤマガキの確かな県産の記録となる。

筆者は初山先生の『神武寺(逗子三角地帯)の植物』(1982)について出版前に請われて僭越にもかかわらず拝見させて戴いたが、この件は全く読み過ごしてしまった。今は亡き先生にお詫びしなければならない。今回『神奈川県植物誌』カキノキ科は幸いなことに中堅気鋭の士・武智憲治氏が分担されるので、気になっていたことを記した。

オオバイボタの原記載と現実との乖離
(長谷川義人)

オオバイボタ *Ligustrum ovalifolium* Hasskarl は神奈川県沿海地に普通にある低木、小高木であるが、この種を最初に記載したのはドイツ人、Hasskarl氏で、しかもそれは日本産ではあるが、ジャワ島のボゴール植物園の栽培品が基である。先日、この原記載を読んでいたところ、花序に関する記載が多くの個体で見られる現実と異なることに気が付いた。一般的にこの種の花序は円錐花序で、その下枝は他種に比べて最も長く広い円錐を示す。しかるに原記載は狭いやや総状花序という表現をしていることは、この種の特徴を書かねばならない筆者にとって困る問題である。少し長いですが次に原記載を紹介する。



Catalogus Plantarum in Horto Botanico Bogoriensi Culturarum / Justo Carolo Hasskarl / Bataviae 1844 ボゴール植物園栽培植物目録バタビア(1844) (表紙の記載)

119	
<i>L. ovalifolium</i> Hrt. Bog. (1) Japon.	F.
<i>L. japonicum</i> Thub. <i>Nyctini mosti</i> Japon.	F.
FRAXINUS Trnf. Endl. Gen. 3353. (<i>Fraxinus</i> , eschenboom; zie Dodon. Crujdb. 1397.)	
<i>F. floribunda</i> Will. Dtr. I. 249. (Nepalia).	A.
SYRINGA L. Endl. Gen. 3355. (<i>Syringina</i> of <i>syrinx</i> , roer, fluit; <i>Syringa</i> , Lillach, Dod. Crujdb. 1310.)	
<i>S. vulgaris</i> L. Dtr. I. 247. Nagelbloem (Europ.)	A. F.
<i>S. persica</i> L. Dtr. I. 247. » (Persia. Hrt. Europ.)	F. S.
FORSYTHIA Vahl. Endl. Gen. 3356. (William Forsyth (1790) engelsche kruidkundige.)	
<i>F. suspensa</i> Vhl. Sbid. Zec. Fl. Jap. 12. t. 3. <i>Rengijv</i> Japon.	F.)
ORDO 131. LOGANIACEAE Endl. Gen. p. 574.	
550. STRYCHNOS L. Endl. Gen. 3359. (<i>Strychnos</i> , de naam voor vergiflige planten, als <i>Solanum</i> enz.; zie Dodon. Crujdb. 898.)	
<i>S. colubrina</i> Will. Bl. Rumph. I. 70. (Rheed. mal. VIII. t. 24.) <i>Aroy Uvengkangkang</i> s. <i>Aroy ki-tjepot goenoeng</i> .	F.)
551. HAEMATOSPERMA Rawdt. (Endl. Gen. 3365*) Bl. Bijdr. 1018. Men. Gen. 259. Com. 167. 9. (<i>Haima</i> , <i>haimatos</i> , bloed; <i>sperma</i> , zaad.)	
<i>H. arborescens</i> Rawdt. Bl. Bijdr. 1019. <i>Kitelong</i> .	F.
552. FAGRAEA Thub. Endl. Gen. 3367. Bl. Rumph. II. 25. Men. Gen. 259. Com. 167. 11 & 12. (J. T. Fagreaus, Med. Doct. & vriend van Thunberg.)	

(*) *Ramis teretibus glaberrimis, foliis brevipetiolatis ovalibus aut oblongis utrinque acutis coriaceis glaberrimis, supra atroviridibus subnitidis subtus pallidioribus, panicula terminali contracta subracemosa, floribus fragrantibus. panicula terminali contracta subracemosa, floribus bracteatis subsessilibus fragrantibus.*

Ligustrum ovalifolium Hrt. Bog. オオバイボタボゴール栽培品 Japon. 日本. (書中のP119)

Ramis teretibus glaberrimis, foliis brevipetiolatis ovalibus aut oblongis utrinque acutis coriaceis glaberrimis, supra atroviridibus subnitidis subtus pallidioribus, panicula terminali contracta subracemosa, floribus bracteatis subsessilibus fragrantibus. 円柱形の枝にあつては全く無毛、葉は短柄があり卵形または長楕円形、両端は鋭形、革質無毛、上面はやや光沢のある暗緑色、下面はより蒼白色、頂生に出る円錐花序は狭まったやや総状花序、苞葉をもつ花はやや無柄で芳香がある。(頁下欄外の訳)

このラテン文は全体に与格(3格)で書かれ、問題の *Panicula contracta subracemosa* の部分のみ主格(1格)で書かれたくせのある文章ではないかと思う。いくらインドネシアにて栽培されたものとはいえ、基準産地が日本の植物であり、あまり標準的でない記載は Original Description として困る。

原著のコピーを支度された故叻山泰一先生にお礼申し上げる。

ゼーメンのヤナギ学説(1903)の紹介 (長谷川義人)

オットー・フォン・ゼーメン Otto von Seemen の『日本のヤナギ属 *Salices Japonicae*』は1903年にライプチヒで発行された。83頁18付図の貴重な本で県立博物館「澤田武太郎文庫」にある。ヤナギ属を研究するものにとって、無くてはならない重要文献である。(本稿

は澤田文庫による)

ゼーメン氏は東プロシア(ドイツに統合された旧一国)に生まれ、軍人(騎兵大尉)であり、功績により、von の称号を得た。ベルリンの王立植物園付属博物館の名誉館員となり、1910年に亡くなった。(小原敬氏提供)

以下にSeemenの*Salices Japonicae*中の分類系を紹介する。節(Sectio)についての記載は

(p.603 に続く)

ゼーメン氏のヤナギ属大綱

AA. Didymadeniae 雄花と雌花は共に2腺体を持つ(背腺体と腹腺体)。

A. Pleonandrae 雄花は2本以上の独立した雄蕊をもつ。

aa. Brachystylae 花柱を殆ど欠く。

Sect. 1. Pentandrae 雄蕊は多くは5本, 独立. 1)アカメヤナギ *S. glandulosa* v. Seem.
* 旧くはこの学名がアカメヤナギに当てられていた。

aa. Dolichostylae 花柱は長い。

Sect. 2. Urbanianae 花穂は垂下。雄蕊は多くは5。独立. 2)オオバヤナギ *S. urbaniana* v. Seem.

A. Diandrae 雄花は2本の独立した雄蕊を持つ。

Sect. 3 Subfragiles 3) *S. dolichostyla* v. Seem.

BB. Heteradeniae 雄花は2腺体を持つ(背腺体と腹腺体)。雌花は1腹腺体のみ。

B. Pleonandrae 雄花は2本以上の雄蕊を持つ。

Sect. 4. Triandrae 4)タチヤナギ *S. triandra* L. var. *nipponica* (Franch. et Sav.) v. Seem.

B. Diandrae 雄花は2本の独立した雄蕊を持つ。

Sect. 5. Albae

aa. 子房は無毛. 5)シダレヤナギ *S. babylonica* L.

aa. 子房は有毛。

a. 腺体:長く, 細い. 6)シロヤナギ *S. jessoensis* v. Seem.

a. 腺体:短く, 広い. 7)シロシダレヤナギ *S. lasiogyne* v. Seem.

CC. Monadeniae 雄花と雌花はただ1本の腹腺体のみを持つ。

C. Choristandrae 雄花は2本が独立した雄蕊か、一部分合成した雄蕊を持つ。

aa. Brachystylae 花柱を欠くか或いは極く短い。

a. 子房は長い柄がある。

Sect. 6. Capreae 8)バッコヤナギ *S. caprea* L.

* 注: 当時はセイヨウバッコヤナギの学名をあてた。

a. 子房は短い柄がある。

Sect. 7. Repentes 9)ノヤナギ *S. repens* L. var. *subopposita* (Miq.) v. Seem.

aa. Meiostylae 花柱は中位の長さ柱頭より長いが子房の半長より長くない。

a. 花序軸と苞葉は赤褐色或いは赤褐色と灰色の混ざった毛がある。

Sect. 8. Vulpinae 10)キツネヤナギ *S. vulpina* Anders.

a. 花序軸と苞葉は灰色或いは白色の毛がある。

b. 子房柄或いは子房柄と子房は有毛。

- Sect. 9. Phyllicifoliae 11) ミヤマヤナギ *S. reinii* Franch. et Sav.
 b. 子房柄と子房は無毛.
- Sect. 10. Hastatae
 c. 子房は長柄がある. 12) シライヤナギ *S. shiraii* v. Seem.
 c. 子房は中位の柄がある.
 d. 葉はランセット形, 尾状に尖る. 下面灰色. 13) シバヤナギ *S. japonica* Thunb.
 d. 葉は狭いランセット形, 両面は殆ど同色. 14) キヌゲシバヤナギ *S. fauriei* v. Seem.
 aa. Dolichostylae 花柱長く子房長の半長かそれより長い.
 a. 子房は無毛.
- Sect. 11. Pruinosaе 15) エゾヤナギ *S. daphnoides* Vill
 *注: 当時はセイヨウエゾヤナギの学名をあてた.
 a. 子房は有毛.
- Sect. 12. Viminalis
 b. 子房無柄 16) キヌヤナギ *S. viminalis* L.
 *注: 当時はタイリクキヌヤナギ(セイヨウ)の学名をあてた.
 b. 子房有柄.
 c. 花穂は葉より前に顕れる. (葉前性) 17) *S. opaca* Anderson
 c. 花穂は葉と共に顕れる. (同季性) 18) *S. sachalinensis* Fr. Schmidt
 *注: 17)18)は共にオノエヤナギ.
- C. Synandrae 雄花は2本が全く或いは大部分が合成した雄蕊を持つ.
 aa. Brachystylae 花柱を欠くか極く短い.
- Sect. 13. Purpureae
 a. 朔果は無柄或いは殆ど無柄.
 b. 花穂は円筒形; 葉は鋭い鋸歯を持つ. 19) コリヤナギ *S. purpurea* L.
 *注: 当時はセイヨウコリヤナギの学名をあてた.
 b. 雌花穂は長い円筒形, むち状; 葉は鈍鋸歯を持つ
 20) エゾノカワヤナギ *S. miyabeana* v. Seem.
 a. 朔果は有柄.
 b. 葉はランセット形. 21) *S. lepidostachys* v. Seem.
 *注: lepidostachys とは「鱗片葉をもった穂状花」の意で現在ではエゾノカワヤナギの異名と考えられる.
 b. 葉は狭い線形. 22) カワヤナギ *S. gilgiana* v. Seem.
- Sect. 14. Subviminalis
 a. 苞: 幅広い楕円或いは卵形, 上端は円頭或いは鈍頭. 腺体: 卵形, 端截する.
 23) オオタチヤナギ・オオシロヤナギ *S. pierotii* Miq.
 a. 苞: 卵形, 長く尖る. 腺体: 狭い線形, 端截する. 24) ネコヤナギ *S. thunbergiana* Blume
 C. Submonandrae 雄花は2本が離生するか, 或いは多少とも合生する雄蕊をもつ. それゆえ
 に雄花は通常1雄蕊を持つ.
- Sect. 15. Sieboldianae
 a. 雄花は2雄蕊か1雄蕊を持つ.
 b. 花穂は葉より前か或いは葉と殆ど同時に顕れる. 25) ヤマヤナギ *S. sieboldiana* Blume
 b. 花穂は葉と共に顕れる. 26) ダイセンヤナギ *S. daisenensis* v. Seem.
 a. 雄花は1雄蕊を持つ.

b. 花穂は葉より前に顕れるか或いは葉と殆ど同時に顕れる。

..... 27)ハシカエリヤナギ *S. buergeriana* Miq.

b. 花穂は葉と共に顕れる。 28)ヤマヤナギ *S. saidaeana* v.Seem.

以下の種はSectio (節)の所属不明としてある。

29)エゾノタカネヤナギ *S. yesoalpina* Koidz.

30)コナガバヤナギ *S. aequitriens* v.Seem.

31)オオキツネヤナギ *S. futura* v.Seem.

32)オクキツネヤナギ *S. matsumuraei* v.Seem.

33)ツクシヤマヤナギ *S. harmsiana* v.Seem.

繁雑なので、これを省略した。なおSect.(節)の語は原著にないが、これを補った。現在のヤナギ属の分類系はアンデルソンやゼーメンの学説を取り入れて発展したものである。

本編をみれば、彼がヤナギ属の分類になにを重視していたかが良く理解できると思う。腺体の数、雄蕊の数、花柱の長さ、子房の毛の有無、腺体の長さ・形状、子房柄の有無などで、特に「腺体の数・形状」を分類の上位に置いた。アンデルソンが「雄蕊の数」を重視したのと対照的である。この面では先学の業績に新機軸を出したいゼーメンの気持ちがよく顕れている。しかし「雄蕊の数」は比較的安定していて腺体のような規則性・安定性にやや欠ける形質より優れているのは言うまでもない。

検索表中の訳語ランセットとは医用のメス(柳葉刀)のことで、披針形に近いものか、同じ形状を指す。訳語中、Hintere Drüseは直訳すると背腺体になるが、これを腹腺体とし、Vordere Drüseを直訳すると前腺体になるが、これも背腺体とした。これはドイツ人と私どもの視点の違いに由来するので原書を直接読む際には注意すべきである。

参考文献

N.J.Andersson, 1863. Monographia Salicum, I.

O.von Seemen, 1903. Salices Japonicae.

長谷川義人, 1993. Otto von Seemen(1838~1910)について. MAKINO, 35: 6.

長谷川義人, 1993. ドイツ人の発想と視点. MAKINO, 36: 7.

マメ科植物・話題あれこれ

(佐々木あや子)

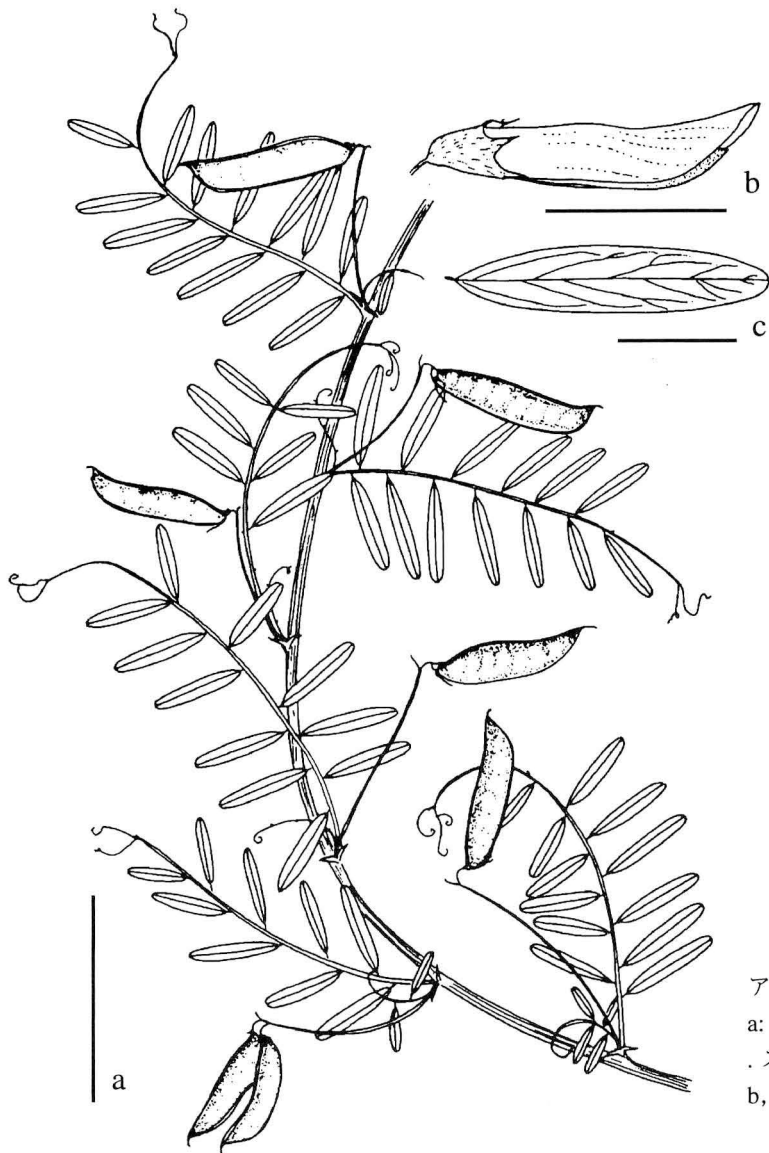
1. シャジクソウ属クシバツメクサの紹介

シャジクソウ属 *Trifolium* L.の日本在来種はシャジクソウ1種であり、県内のシャジクソウ属は全て帰化によるものである。その中には牧草として明治維新頃渡来し、全国に野生化したシロツメクサやムラサキツメクサなどが含まれる。その後も輸入穀物や家畜の飼料に混入して、各地に帰化したものも多い。

ここで紹介するクシバツメクサ *Trifolium angulatum* Waldst.& Kit. も、横浜市瀬谷区の畑地で採集されたものであり、近くには製粉かすが撒かれた畑のあることから輸入小麦



クシバツメクサ. a: 全体, b: 葉, c: 花. スケールは5mm.



アレチノエンドウ.

a: 全体, b: 花, c: 小葉
 . スケールはaが5cm,
 b, cが1cm.

に種子が混入した可能性が大きいという。

クシバツメクサ(櫛歯詰め草)は、その名のとおり葉には櫛の歯状の鋭い鋸歯があり、それだけでもシャジクソウ属の他の種から容易に識別できる。また、葉腋や枝先につけた花序は植物体の割には大きく、針状に尖った萼歯と7~8mmある淡紅色の花冠をつける。そして、花後、それまでほとんど目立たなかった小花柄は4~5mmに伸び、花は少しだらしく下を向く。東ヨーロッパ原産、中部ヨーロッパに帰化している。勝山・松本・秋山(2000)が詳細に報告している。

標本:横浜市瀬谷区上瀬谷 1999.9.20 松本雅人 KPM-NA011633.

2. 新帰化植物, アレチノエンドウ

厚木市下川入の路傍で松本雅人氏がソラマメ属 *Vicia* L. の見慣れない植物を採集された。帰化によるものと考え、海外の文献を当たったところ、Zohary (1987), Pignatti (1982), Tutin et al. (1968)により、地中海沿岸に分布している *Vicia monantha* Retz. と判明した。荒地にたくましく生育していて、エンドウに似ていることから、アレチノエンドウと新称し、日本新産の帰化植物として報告する。また、県博でトウエンドウ *V. bungei* Ohwi として所蔵されていた茅ヶ崎産の標本も本種と同一のものと判り、今回厚木市で採集された標本と併せてアレチノエンドウの特徴を記す。

1年草。茎は長さ80~100cmになり、疎らに軟毛がある。葉は6~10cm、葉軸の先は2~3回分枝した巻きひげとなる。小葉は7~8対、まばらに毛があり、長さ1.5~3.5cm、幅3~7mm、線形から長楕円形、先端は鈍頭、切り形でときにわずかに凹み、微突起がある。葉は有毛、小形で2裂し、全縁、先は尖る。花序は葉より短く、淡青色、長さ1.3~1.5cmの花を2~3個つける。萼は長さ4~5mm、萼裂片はほぼ同長、筒部より短い。豆果は扁平、長楕円形、無毛、汚黄褐色、長さ3~4.5cm、幅8~10mm、6~7個の種子を入れる。種子は黒褐色、球形、径4.5~5mm。

*Vicia monantha*は原産地では、半砂漠地の畑地や休耕畑に生育しているという。今回、本種を採集された松本氏によれば、採集地には数年前から見られたという。また、県博に収蔵されていた茅ヶ崎産の標本は1993年のものであり、採集者の三輪氏によるとかなり旺盛に生育していたが、現在は環境が変わり見られなくなってしまったとのことである。

標本：茅ヶ崎市芹沢 1993.5.21 三輪徳子 KPM-NA0114797, 厚木市下川入 2000.5.3 松本雅人 KPM-NA0119086。

3. ハクモウアカツメクサの記述一部訂正

本誌No. 49: 564で紹介したハクモウアカツメクサ *T. striatum* L.の花序の記述に一部誤りがありましたので、ここで訂正させていただきます。

花序は短い枝の先につき、直径約5mm、多数の花をつける。萼は筒部の長さ約2.6mm、10脈があり、萼歯は5個で長さ約2.2mm、先は鋭く尖り、長毛に被われる。

文献

勝山輝男ほか、2000. 神奈川自然誌資料 (21): 5-6.

Zohary, M., 1987. Flora Palaestina. The Israel Academy of Sciences and Humanities, Vol. 2, Jerusalem.

Pignatti, S., 1982. Flora d'Italia. Vol. 1. Bologna.

Tutin, T.G., et al., 1968. Flora Europaea Vol. 2, Cambridge University Press

南足柄でクモランを発見

(埜村恵美子・菊地真知子)

クモラン *Taeniophyllum glandulosum* Blume は古い記録では鎌倉今泉・登戸にあったとされますが、『神奈川県植物誌1988』の調査では確認されなかった種です。このクモランを南足柄で発見しましたのでご報告いたします。

2000年5月21日、南足柄で未調査になっていた林道沿いの沢の対岸に寄ってみました。そこには民家に隣接した梅林がありました。梅の木は直径20cmくらいのもので、ノキシノブやウメノキゴケが多数着生していて、下草が繁り、あまり手入れがされていないようでした。その1本の幹の地上1.7mくらいの所に、葉がなく、根(葉緑体のある気根)だけ10本くらいを、放射状に広げ貼り付いているクモランと思われる植物を見つけました。他の木も捜しましたが、結局この1株しか発見できなかったので写真(表紙参照)のみで、標本は採取しませんでした。

その後、7月30日に再度訪ねたところ、4個の花が咲き終わり、果実になり始めていました。その様子から花期は7月前後と思われます。

クモランは根(気根)が長さ2~3cmで全体でも5cmくらいと目立たない植物ですが、梅の木が庭に植えられていることから、案外身近なところで発見されるかもしれません。

チクゴスズメノヒエ、神奈川県に産す

(菊地真知子・埜村恵美子)

2000年8月20日、ミズオオバコの開花を見るために寒川町の田圃道を走行中、黒っぽい花序が2本V字状についたスズメノヒエ属の植物を見つけました。今までに見たスズメノヒエ属植物とは違うように思い、調べてみましたが、県誌、その他の図鑑にも記載がなく、県博へ標本の一部を送りました。その結果、標本が完全でないのもう一度、取り直すように御指示を頂きました。

その後、増補日本イネ科植物図譜(1993)のチクゴスズメノヒエ *Paspalum distichum* L. var. *indicum* Shinnarsではないかと推定いたしました。

チクゴスズメノヒエ キシュウスズメノヒエ

花序	2(～3)本	2本
葉鞘の毛	長白毛が密生	無毛(葉鞘口部には毛がある)
葉身の毛	白毛あり	無毛
葯	黒紫色	黄色
第1苞穎	小穂より長く三日月状に湾曲	ないか退化して鱗片状

た。再度採集し、県博に送り、チクゴスズメノヒエに間違いのないとの返事を頂きました。

特徴としては、葉鞘や節に密生した長白毛、葉身に疎生する白毛、2本の総からなる花序、黒紫色の柱頭、紫色の葯などです。この植物は壮大で多数分枝しながら長いほふく茎を伸ばし、水面に広がり、田の厄介な雑草になることと思われます。

特に第1苞穎の特徴は他のスズメノヒエ属にない特徴で、同定の決め手になると思います。



a: チクゴスズメノヒエの植物体の一部, b: 同, 小穂, c: 同, 葉鞘, d: キシュウスズメノヒエの小穂. スケールは1mm. 佐々木あや子画.

*この原稿を受け取ってから、平塚市博物館の標本庫でこの仲間の標本を調べていたら、チクゴスズメノヒエが1点(秦野市今泉 1999. 11.18 金井和子 HCM085782)あることがわかりました。その気になって探すことの大事さを再認識しました。(事務局 木場)

タシロランの新産地

(奥津均)

2000年7月16日、横浜市磯子区氷取沢にて、タシロラン *Epipogium roseum* Lindl. の群生を見た。数日後の、再訪の観察を含めて報告する。

現地は山の中腹で、アカガシ、ケヤキ、スギなどがまばらに生える林中で径50m程の円形の窪みに3群あった。ここはハイキングコースより離れているので表土はとても柔らかい。

一つの群には、およそ40cm四方あたりに6～7株ずつあり、茎長の最大は42cmであった。全体には花の盛期が過ぎていて、半数は茎が柔らかくなり、腐る寸前で、くずれかけていた。種子の散布はどうかを見るため、結実した茎の中程を手で持ち、振ると、無風ではあったが、微粉状態の種子はすぐ落下することなく、スギの花粉のようにふわふわとたどった。

茎は軟質で生長が速く、直ちに立ち腐れるが、朔果中の種子形成も比較的速い。また、一群の中には、数日前に伸びたばかりと思われる20cmくらいの若い茎が1～2株あり、これには白い花をつけていた。これらの事項より新しい茎の発生から数日毎に3～4回の新規の発生を繰り返し、最初の発生から消滅まで約3週間と思われる。この日ははからずも、腐った茎、結実時期、新しい茎についた花、と3様が見られた。

標本を作り、神奈川県立生命の星地球博物館と横浜市こども植物園標本室に結実時期のものと、新しい花のついたものを一組にして写真と共に提供した。

参考文献

- 大森雄治, 1984. 三浦半島で再発見されたタシロラン. 神奈川自然誌資料, 5: 71.
 大森雄治, 1987. 観音崎におけるタシロランの生育状況. 横須賀市博物館報, 34: 1.
 浜口哲一他, 2000. 湘南植物誌V, p.77, 分布図p.79, 平塚市博物館.



タシロラン.

ホウキアゼガヤ(新称)

(秋山幸也)

横浜市瀬谷区上瀬谷で、松本雅人氏が採集されたイネ科アゼガヤ属 *Leptochloa* の一種を、相模原ブロックで検討してきた。細長い総を数多くつけ、葉梢に細毛を散生することから、一見するとイトアゼガヤ *L. panicea* (Retz.) Ohwi に似ている。しかし、よく見るといくつかの点で異なるため、文献をあたってみたところ、熱帯アメリカ原産で北米大陸南部にかけて分布する *L. filiformis* (Lam.) P.Beauv. であることがわかった (Hitchcock 1951)。種小名は「糸状の」という意味であるが、前述のイトアゼガヤですでにこの形容詞は使われている。このため、若い花序が葉鞘からはみ出した様子が箒に似ているので、ホウキアゼガヤと新称することにした。原産地では開けた草原や路傍に普通に見られる種のようなのである。

アゼガヤ属は県内において、アゼガヤ *L.*

ツルマオの県内初見

(奥津均)

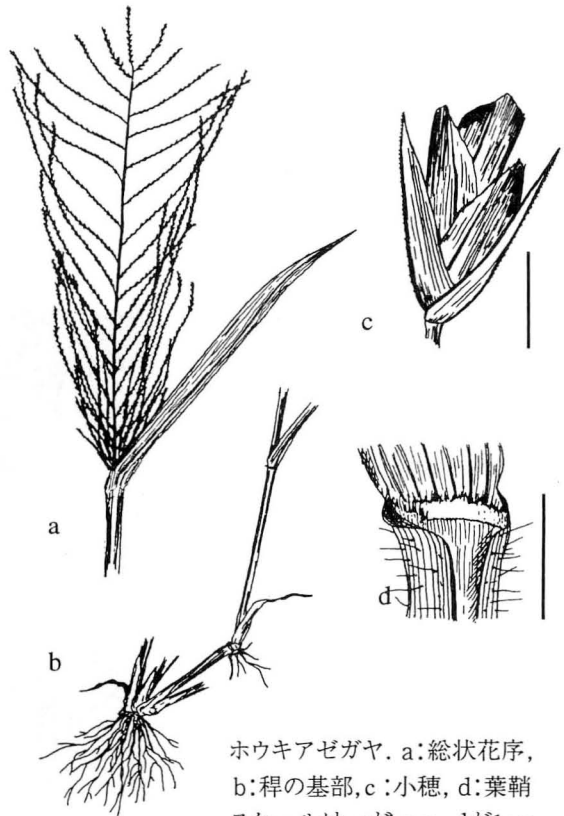
ツルマオ属は世界に15種あるが、本邦ではツルマオ1種のみがある。ツルマオ *Gonostegia hirta* (Blume) Miq. は暖帯～熱帯に生育し、国内では静岡県より南に生育し、神奈川県内では報告がなかった。

2000年9月21日に、小田原いこいの森から塔の峰へ向かうハイキングコースで開花中の群生を見た。なにぶん、つる植物なので株数は数えられないが50m くらいの距離をおいて、3ヶ所で確認した。24日に再訪して、即日、県立博物館に収めた。ご指導下さった長谷川義人先生に感謝します。

参考文献

北村四郎他, 1961. 原色日本植物図鑑. 保育社.

佐竹義輔他, 1982. 日本の野生植物. 平凡社.



ホウキアゼガヤ. a: 総状花序, b: 稈の基部, c: 小穂, d: 葉鞘
スケールは, cが3mm, dが1cm.

*chinensis*およびニセアゼガヤ *L. uninervia* がそれぞれ少数記録されている(大場 1987, 小崎 1991)。イトアゼガヤは暖地に帰化が知られるものの、県内では記録がない。本種は今のところ瀬谷区の1カ所で採集されたに過ぎないが、他のアゼガヤ属とともに今後の動向が注目される。

本種は1年草で高さ60~100cm, 根元付近から数本が束生し、ときに地上をはって基部から発根する。葉は細長く、幅0.7~1.5cm, 長さ15~40cm, 上部の葉梢にはまばらな毛があり、その基部の多くは硬点となっている。円錐花序は長さ15~40cm, しばしば紫色を帯びる。総は細く、長さ5~15cmで、3~4小花からなる小穂を多数つける。小穂は長さ2~2.5mm, 第1苞穎と第2苞穎がほぼ同長で1.7mmである。イトアゼガヤとの明確な識別点は、この第1苞穎と第2苞穎の長さがほぼ同じでやや大きいという点である。逆に言えば、これ以外に明確な違いが無く、ホウキアゼガヤも個体によっては第1苞穎がやや短いものも散見される。北米の文献をいくつかあたってみたが、残念ながら熱帯アジア原産とされるイトアゼガヤ *L. panicea* と併記したものが無かった。このため、両種間の検討不足は否めないが、植物誌2001の編集作業の進行上、現段階での検討結果を報告することとした。

標本：瀬谷区上瀬谷
1999.10.31 松本雅人
SCM013761

参考文献

- Hitchcock, A.S., 1951: Manual of the Grasses of the United States. 2nd ed.
大場達之, 1987: ニブイロアゼガヤ(新称). FK (24): 187.
小崎昭則, 1991: 神奈川県産の植物補遺(1) ニセアゼガヤ. FK (30): 305.

アメリカミコシガヤの学名訂正とナガバアメリカミコシガヤ

(勝山輝男)

2000年2~3月頃、菅沢さんより提出された標本の中に1998年6月に相模湖町道志新田で採集されたアメリカミコシガヤと書かれた標本が入っていた。アメリカミコシガヤは1992年に吉川アサ子さんが川崎市麻生区の宅地造成地で採集されたものに、勝山(1992)が和名を新称し、*Carex vulpinoidea* Michx. と同定したものである。相模湖町の植物は全体はアメリカミコシガヤに似ているが、果胞が狭卵形で長さ約2mmと小さく、果胞が広卵形で長さ約3mmあるアメリカミコシガヤとは異なるものであった。そこで、2000年6月に発見者の菅沢さんをお願いして、相模湖町道志新田の産地を案内していただいた。

麻生区のアメリカミコシガヤを *C. vulpinoidea* にしたときは、Gleason & Cronquist (1991) に従い種を広く扱った。これに従えば、相模湖町の植物も *C. vulpinoidea* になってしまう。果胞の大きさや形の他にも、植物体の色、葉が花茎よりも著しく長くなることなども違い、同種とはみなせない。

そこで、最近出された Mohlenbrock (1999) で調べ直したところ、相模湖町の植物が本当の *C. vulpinoidea* Michx. にあたり、麻生区の



アメリカミコシガヤ(左)とナガバアメリカミコシガヤ(右)

ものは*C. brachyglossa* Mack.であることが明らかになった。そこで、アメリカミコシガヤの学名を*C. brachyglossa*に変更し、相模湖町で採集された本当の*C. vulpinoidea*には新たな和名をつけることになった。菅沢さんと相談し、葉がアメリカミコシガヤに比べて著しく長いのでナガバアメリカミコシガヤ(菅沢新称)の和名をつけることにした。両者の形態の詳細は「神奈川県植物誌2001」に譲り、両者の生態写真を載せる。両者の葉の長さの違いがよくわかると思う。

文献

Gleason, H.A. & A.Cronquist, 1991. Manual of Vascular Plants of Northeastern United States and Adjacent Canada, Second Edition. lxxv+910pp. New York Botanical Garden, New York.

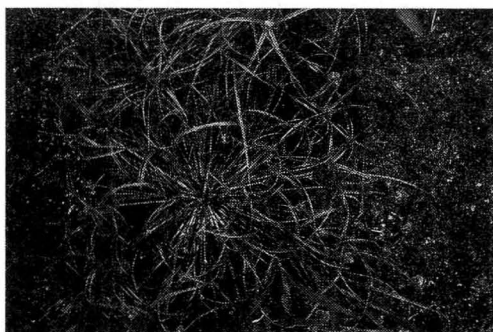
勝山輝男, 1992. Flora Kanagawa, (34): 371.

Mohlenbrock, R.H., 1999. The Illustrated Flora of Illinois, Sedges: *Carex*. 328pp. Southern Illinois University Press, Carbondale and Edwardsville.

アオテンツキ、ヒメアオガヤツリ、そしてシマクサギ採集記

(勝山輝男)

2000年9月1日、横須賀市自然博物館で標本のデータ入力をしている中山博子さんより、アオテンツキらしいものを三浦ブロックの鈴木美恵子さんが、三浦市下宮田の小松ヶ池で採集されたので、見て欲しいという電話と、その植物の陰影のファックスが送られてきました。ファックスの陰影を見ると間違いなさそうです。アオテンツキ *Fimbristylis verrucifera* (Maxim.) Makinoは神奈川県植物目録(1933)と神奈川県植物誌(1958)に「横浜」の記録がありましたが、その後採集されず、標本も確認されていませんでした。中山さんによると小松ヶ池の水を抜いて、ヘト口を取り除く作業を行っており、その干上がった池底



アオテンツキ(上)とヒメアオガヤツリ(下)

にたくさん生えてきたということです。池は作業が終わると再び水が張られてしまうとのことでした。アオテンツキのような植物は埋土(泥)種子を多量につくり休眠し、池が干上がったたりするなどの条件が整うと大発生します。他にも同じような性質の植物が発生している可能性もあり、水が張られないうちに現地を見たいと思いました。手帳を見ると、9月4日(月)しか時間がとれそうもありません。月曜日は鎌倉のグループが定例会として採集に出ている日だったので、中山さんに無理を言って、鎌倉月曜会の方々もいっしょに行くことになりました。鈴木美恵子さんと三浦海岸駅で待ち合わせて、小松ヶ池へ向かいました。

池の水はすっかり抜かれ、作業員が胸まであるゴム長をつけて泥を取り除く作業をしていました。干上がった池底の泥の上にはアオテンツキが一面に生えていました。作業員にことわって採集させてもらいましたが、作業員いわく、泥にはまってしまったら助けてあげられないよ、あまり中央に入ってはだめだよ、との

ことでした。一見すると表面は乾いているように見えるのですが、中はどろどろで、じょうずに移動しないとハマってしまいます。足がもぐりはじめると、簡単には抜け出せません。皆で手を引っ張ってやっとのこと脱出する場面もありました。無事に採集が終わってほっとしたメンバーのスナップを載せておきます。アオテンツキの他にはシロガヤツリに似たカヤツリグサ科植物がありました。これは持ち帰って調べたところ(実はすぐにはではなく、だいぶ後になって調べたのですが)、ヒメアオガヤツリ *Cyperus extremiorientalis* Ohwi でした。ヒメアオガヤツリは神奈川県からは初めての記録です。

泥だらけの小松ヶ池だったので、お昼ごはんは海岸のさわやかな所で食べたくなりました。中山さんが、それならば諸磯のアマクサギ?の花が咲いているかもしれないので、それを見ながらお弁当を食べようと提案がありました。以前から三浦グループの間では、諸磯と城ヶ島に葉が無毛のクサギがあり、南西諸島にあるアマクサギではないかといわれていたそうです。さっそく、お弁当を買って諸磯浜へ移動することにしました。

アマクサギ?は葉がほとんど無毛で、花の萼が白く、花冠が小さく、雄しべも短いように感じました。葉に毛のある普通のクサギも近くにあり、これは萼が赤い見慣れた花を咲かせていました。これを見たとき、2~3年前に植物研究雑誌に発表された伊豆諸島産のクサギの新種(このときには名前がどうしても思い出



シマクサギ

せませんでした)ではないかと思いました。帰って調べてみると(これはその日のうちに調べました)、「井上 健・長谷川雅美・小林史郎, 1997. 伊豆諸島のクサギ属の1新種. 植物研究雑誌 72(2): 117-124.」の論文があり、シマクサギ *Clerodendrum izuinsulare* K.Inoue, M.Hasegawa & S.Kobayashi が記載されていました。諸磯のアマクサギ?はシマクサギの記載や写真と同じものでした。

結局、この日はアオテンツキがきっかけで、三浦半島から神奈川県新産の植物がいっぺんに3種も見つかったことになります。すでに原稿の締切りは過ぎていましたが、最後の駆け込みで「神奈川県植物誌2001」に間に合わせることができました。

編集後記

◎前号で、総索引や名簿を作成すると書きましたが、もう少し時間がかかりそうです。

◎今回のFLORA KANAGAWAは、佐々木あや子さんが編集を手伝っていただきました。線画をイメージスキャナで取り込んで、文字と一緒に割り付けてといった作業をお願いしました。彼女のメリットは、絵解き検索をパソコンで作れるようになることで、事務局のメリットは、次号からも編集作業を手伝ってもらえる助っ人ができたことと思っています。

◎20世紀のうちに発行したかったのですが、今日になってしまいました。早くに投稿して下さった方には、申し訳ありませんでした。



小松ヶ池にて